

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル:「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」(平成 25 年度第 2 回研究会)

日時:平成 25 年 11 月 16 日(土曜日)午後 2 時より午後 6 時 30 分

場所:東京外国語大学本郷サテライト 3 階セミナールーム

1. 長島弘(AA 研共同研究員、長崎県立大学名誉教授)

「ムガル帝国グジャラート地方における商人と国家―若干の論争の紹介を中心に―」

はじめに

本報告では (1) 16-18 世紀インド西部・グジャラート地方の商人と国家の関係、(2)18 世紀 (ムガル帝国衰退期) のグジャラート経済についての若干の論争の紹介し、今後の研究方向を探りたい。

I. ムガル帝国グジャラート地方の商人と国家の関係についての若干の論争の紹介

ムガル帝国における商人と国家の関係についてはそれまでも諸説があったが、最近の論争の発端となったのはピアスン (Pearson, M.N. 1976) の説で、彼は 16 世紀のグジャラート王国の商人がインド洋でポルトガルの貿易政策に服したのは同王国における商人と国家の接触の少なさの結果であると述べ、ダースグプタ (Das Gupta, A. 1979) もそれに同意し、ピアスン説は 18 世紀初めのグジャラートにおいても完全に有効で、国家は商人の保護のためにあまり努力せず、他方、商人の生活を耐え難いものにもしなかったと述べた。

ピアスン説に対してはさまざまな批判が出された。ムースヴィ (Moosvi, S. 1977 書評論文) はポルトガルとの海上軍事力の格差を重視し、またムガル帝国の関税率の低さを商業軽視とはみなせないと批判した。ファン・ザンテン (Van Santen, H.W. 1982) は商人は地方や中央の政治活動に恒常的に参加したし、シャー・ジャハーン帝は大船の建造と貴金属流入を図る政策＝重金主義を採ったと批判、我が国でも長島弘 (1984 ほか) はポルトガルによるキャンベイ湾の封鎖の容易さとグジャラートの官僚と商人の相互依存関係を指摘し、近藤治 (2003) はアフマダーバードの豪商とムガル皇帝との親しい関係を強調し、真下裕之 (1995, 2009) はディーウ島をめぐるポルトガルとグジャラート王国との対立関係を具体的に分析し、グジャラート側の敗北を支配者の倫理観や社会諸集団間の関係という一般論で説明することは無理であるとする。彼はまたムガル朝君主の保有する巡礼船にはさまざまな人が投資したことを示す。

これらの批判に対してピアスン(2003)は、①ムガル朝もサファヴィー朝も貿易の搾取も推奨もしなかった。インドの君主の一般的な態度はやや距離をおいた慈悲の態度であり、君主による直接の介入は最も非日常的であった。②オン・プラカシュやファン・サンテンの

研究は「私が以前の研究において描いたよりより密接な関係がムガル朝インドにおける国家と商人の間にあったことを示す」。③キャンベイ湾内のほとんどの大きな港はポルトガル艦隊が監視できた、とした。①はほぼ彼の旧説を踏襲しているが、②③は批判者の説を受け入れている。

ハサン (Hasan, F. 2004) はムガル帝国と社会との関係についての従来の説をより包括的に分析・批判した。従来の研究には大別して①構造機能主義的モデル (A. 中央集権的国家モデル[アリーガル学派他]、B. 家産制国家モデル[Blake, S.P., Richards, J.F. ら]、C. 分節国家モデル)、②過程重視学派[Subrahmanyam, S., Perlin, F., Swartz, M. ら]があるが、①と②の統合が必要である。政治構造を政治過程によって不断に変化する行動の単位とみなすことによって、政治構造と政治過程の統合を図ることが大事である。グジャラート王国とムガル帝国のグジャラート征服過程をみると、どのような征服も宗教指導者、小商人、在地のジェントリ (郷紳)、部族・民族的グループ、戦士氏族、さらには都市の庶民の支持がなければ可能ではなかった。国家は地方のエリートとの主権の共有を避けられなかった。ムガル帝国は社会的諸力からの分離が極めて弱い国家である。日常的に社会の諸構成グループと関係しあうなかで国家の形成がなされた。18 世紀初めまでに、都市における商人および商人の団体 (マハージャンなど) の役割の増大が見られた。商人たちの同盟罷市 (ハルタル) を通じてのスーラト県長官の更迭などの目的を実現した。また商人による官職や徴税の請負が拡大した。18 世紀のマラーター勢力のグジャラート進出後も在地の郷紳などはムガル皇帝からサナド (証書) の受領を希求した。ムガル皇帝のイデオロギー的権威とマラーター勢力の政治権力の増大とは共存し、在地の勢力はマラーター勢力自身がムガル皇帝にとって代わることは承認しなかった。マラーター勢力と後のイギリスの出現・台頭は共にこのような政治過程の産物である。スーラトにおけるイギリスの権力獲得は帝国の主権の枠組みの内部で起こったのであり、それに対抗して起こったのではない、と。

最近ナードゥリー (Nadri, G.A.. 2009) はその 18 世紀グジャラート社会経済史の研究において、いわば商人強大説を唱えた。インドの他の地域に比べてグジャラートでは国家や地方役人は商人に対して相対的に弱体だった。歴史的にグジャラートの国家は商人と金融業者に依存していた。後者は統治者の権力を抑制する財力をもっていた。ピアスンがグジャラートにおけるこの関係の特徴に気付いたが、それを国家の不干渉的態度と理解したのである、と。

II. 18 世紀 (ムガル帝国衰退期) のグジャラート経済をめぐる若干の論争の紹介

ダースグプタ (Das Gupta, A. 1979) はムガル帝国最大の港市スーラトの衰退について、17 世紀末には衰退化したとする従来の説を批判して、18 世紀前半中に衰退化したとする説を主張した。1701 年にスーラトは大いに繁栄していた (112 隻の大洋航行船が存在)。ボンベイが発展したからスーラトが衰退したのでなく、スーラトが衰退したからボンベイが発展したのである。スーラトの衰退の真の原因は 3 大ムスリム帝国 (ムガル朝、サファヴィー

朝、オスマン朝)の弱体化と崩壊である。スーラトの後背地たるムガル帝国の中央部が無政府状態となり、1720年代、グジャラートはマラーター勢力に襲撃され、スーラトの市場も狭まった。18世紀前半にスーラトの貿易量が4分の1に減退した、と述べる。

それに対してナードゥリー(2009)はグジャラート経済の繁栄は18世紀後半に復活したと主張する。すなわち18世紀の衰退という概念は、1720年代後半から1740年代に限定した場合にのみ有効である。オランダ東インド会社のスーラトでの輸出入額を見てみると1750年代～60年代半ばごろまでスーラトの輸出入額は18世紀初めのそれに匹敵する額である。18世紀後半にはバニヤー商人やパールシー商人だけでなく有力なムスリム船主商人も繁栄を維持していた。彼らの家運が傾くのは1790年前後からである。18世紀後半のグジャラートの農村経済も衰退していなかった。

またラーイ(Arasaratnam, S. & Ray, A. 1994)は、キャンベイ市について、18世紀における漸次的衰退は否定できないが、周辺地域でのいたるところで綿花が栽培されており、それから大量の綿織物が織られているし、キャンベイと西アジアとの直接貿易も継続されている、と述べる。

おわりに

以上、Iでは、特にハサンやナードゥリーの研究に見られるように、ピアスンの問題提起を受けて商人、その他の階層の人々とムガル国家との関係についての研究は進展してきた。私も当初はピアスン説に反発する面が強かったが、現在ではグジャラート、特にスーラトの商人や東インド会社とムガル朝との関係を清朝や特に「鎖国」下の日本と比較した場合、国家としての支配の強度や制度にかなり相違があると考えている。たとえばムガル朝が帝国内各地に比較的自由に東インド会社の商館の開設を許可し、またアーグラ周辺の藍作地帯にヨーロッパ商館員がかなり自由に浸透することを黙認していること、さらにはスーラトの行政当局やデリーのムガル朝当局が独自の通訳などを任命していた様子があまりみられないことなどである。

IIでは、18世紀後半のスーラトでのオランダ東インド会社の貿易の復活からすぐにグジャラート経済の繁栄の復活と結論できるのかさらに検討が必要であろう。ムガル帝国衰退期のインドのどの地域でも経済の繁栄、発展が見られたのか、繁栄と発展の指標・基準をどこに置いたらよいのか。ナードゥリーの見解でも、スーラトの場合も発展と言いながら、18世紀末にはイギリスの支配の本格化に伴い多くの商人が衰退していくのであり、それはイギリスの統制・支配の強化に抵抗できなかったということなのか、それともボンベイの発展のなかでスーラト経済が衰退したということなのか、さらに検討が必要であろう。

2. 上原永子(AA 研究共同研究員、大谷大学)

「シンド地方仏教美術の諸問題」

1. はじめに

シンド地方は現在のパキスタン南西部に位置し、インド・グジャラート州やラージャスタン州に接する。同地方は今回中心に据えるミールプル・ハース *Mīrpur Khās* の他にもトゥール・ミール・ルカーン *Thūl Mīr Rukān* やモヘンジョ・ダロ *Mohenjo Daro* といった仏教遺跡が点在しており、20 世紀初頭に H. Cousens によって発掘が行われたもののその実態が明らかになっているとは言い難い (H. Cousens, *The Antiquities of Sind with historical outline, Archaeological Survey of India, Imperial Series, Vol. XLVI, Calcutta, 1929.*)。またグプタ朝時代におけるインドと西方世界との文化交流を検討する上で重要であると考えられるにも関わらず、インド美術史における位置づけもきちんとなされていないまま、今日に至る。本報告では、仏教部派の中でも正量部が大勢を占めていたと伝えられるシンド地方の仏教遺跡ミールプル・ハース出土作例の再検討を行い、その歴史上の位置づけを探り、最終的にはこれらの美術作例を寄進したであろう仏教支持集団が如何なる人々であったのかを解明する一助となることを目指す。

2. シンド地方の仏教遺跡



シンド地方の仏教遺跡は日干しレンガを主要な建築材として用いており、装飾モチーフや仏像といった彫刻作例はほとんどがテラコッタ製である。ミールプル・ハースは中でも最も豊富に彫刻作例を残しており、A. Woodburn によって 19 世紀末に持ち去られた仏像 1 体がヴィクトリア&アルバート美術館に、以下の作例がムンバイの CSMVS (Chhatrapati Shivaji Maharaji Vastu Sangrahalaya, 旧プリンス・オブ・ウェールズ博物館) に收藏されている。

参考地図 (出典: 肥塚・宮治, 2000.)

- ・装飾レンガおよび建築部材断片 297 点
- ・高浮彫の仏坐像 5 体
- ・パネルに浮彫された仏坐像 1 体
- ・浮彫の若い男性立像 1 体
- ・クペーラ (?) の円形パネル 2 点

- ・型押しで制作されたタブレット 多数
- ・石製のジャータカとされる説話図断片 等。



図 1. 装飾レンガ (キールティムカ)



図 2. 装飾レンガ (市松模様とパルメット)



図 3. 装飾レンガ (パルメットと連珠)

CSMVS にはこの他、出土地がはっきりしないながら、釈迦の誕生、出家前夜を主題とする仏伝図を描いた浮彫パネルがそれぞれ 1 点、説法印仏椅坐像と触地印仏坐像を描いた浮彫パネルが同じく 1 点ずつ所蔵されている (Cousens 1929, Fig. 15)。

これらの仏教遺跡は 19 世紀、鉄道敷設等ための建材として持ち去られるなど深刻な人為的破壊を被った。20 世紀初頭に H. Cousens によって発掘調査が行われたものの、その後も上記のような被害を受けたことが確認されている (J. E. Van Lohuizen-de Leeuw, “The pre-Muslim antiquities of Sind”, *South Asian Archaeology 1975*, Brill, 1979, pp. 151-174, Pls. 70-90.)。

3. シンド地方仏教美術の研究史

・編年の問題

H. Cousens による発掘の報告 (Cousens 1929) の後、同地方の仏教遺跡は注目を浴びたとは言い難く、いくつかある論考の見解も一致を見ない点が多い。彫刻作例の制作年代や仏教寺院の活動時期に関しても、後 4 世紀頃とする U. P. Shah (U. P. Shah, “Western Indian sculpture and the so-called Gupta influence”, *Aspect of Indian Art*, Brill, 1972, pp. 44-48, Pls. XVIb-XXIa.) や M. Chandra (M. Chandra, “A Study in the Terracottas from Mirpurkhas”, *Prince of Wales Museum Bulletin*, No. 7, 1964, pp. 1-22, Figs. 1-15.)

に対して、個々の作例の制作年代に幅があることを想定して 6～11 世紀頃と主張する de Leeuw (de Leeuw 1979)、さらに近年ミールプル・ハースのストゥーパの復元図制作を試みた S. Mukherjee (S. Mukherjee, “The reconstruction of a Buddhist stupa at Mirpurkhas”, *Sindh: Past Glory, Present Nostalgia*, Mumbai, 2008, pp. 62-73.) が、ストゥーパが最終的な状態に落ち着いたのは 4～5 世紀とみるなど、未だ議論の余地が残されている。

・ガンダーラ美術、グプタ美術等との影響関係の問題

編年の問題は、周辺地域の美術との影響関係についての見解の不一致に起因するところが多い。グプタ美術の影響を重視する Chandra に対して Shah はガンダーラ以西からの影響を積極的に主張する。一方 de Leeuw や Mukherjee は双方からの影響を認めるばかりでなく、アジャンター石窟などとの影響関係にも言及する。



図 4. 付柱（ミールプル・ハース）



図 5. 付柱（ガンダーラ）

例えば、ガンダーラからの影響を指摘しようとする際には、装飾文様の類似の他にミールプル・ハース（図 4）やトゥール・ミール・ルカーンなどの付柱の柱頭が、ガンダーラの付柱（図 5）に多く看取されるコリントス式柱頭との比較対象として挙げられた。後者も既に、ギリシャにおけるコリントス式柱頭からはかなり変形しているが、それでもアカンサスの葉を主要なモチーフとする点はギリシャから継承している。しかし前者、シンド地方の柱頭にはもはやアカンサスが認められるとは言い難く、両者は形式そのものが大きく異なる。概ね台形を呈し、2 段もしくは 3 段から成るなど、ガンダーラの柱頭を端緒としていることは窺えるが、今後より詳細に比較検討を行う必要があろう。



図6．仏坐像頭部（ミールプル・ハース） 図7．仏立像頭部（マトゥラー）

一方グプタ美術からの影響を指摘する際には、その有力な根拠として仏像の頭光にあしらわれた装飾の類似性が主張される。グプタ朝時代マトゥラー（図7）やサルナートで制作された仏像（図9）は、円形の頭光内部に、円弧文や連珠文に加えて蓮華を多用した植物の文様などが同心円状に配され、全く装飾を施さないシンプルな円盤が多数を占めるガンダーラの頭光とは確かに大きく異なる。また文様の配置を見ても、マトゥラーやサルナートでは外縁部に円弧文と連珠文が配され、ミールプル・ハース（図6）でもそれに対応するように鋸歯文と連珠を意図したと思われる小さな四角形を並べた文様が看取される。またその内側に蓮華を含む植物文がひときわ太く描かれ、連珠文を境として仏陀の頭部に最も近い部分には装飾を施さないという点では、マトゥラーよりもサルナートとの親和性が高いことを窺わせる。

上記のように、柱頭においてはガンダーラ美術との関連が、頭光の装飾においてはグプタ美術との関連がそれぞれ窺える。地理的に両者の中間にあるというシンドの位置をよく表しているかのようではあるが、これらシンドの美術の特異な様相を説明するには検証の精度も事例の数も未だ不十分であろう。しかし周辺地域の美術との関連をより詳細に検討することは、研究史において触れた編年の問題を考える際の傍証となりうるという点でも重要であると考えられる。そこで次に、仏坐像の服制、説法印の形式および仏伝図の表現伝統の3点を挙げて、他地域との関連性について検討を加え、編年やインド美術史におけるシンド地方の位置づけを探る手がかりとしたい。

4．周辺地域との比較～グプタ美術からの影響を中心に～

・服制

ミールプル・ハースからは、前述の通り数体のストゥッコ製仏坐像が出土している。これらはストゥーパの方形基壇側面に設置されたもので、数人の異なる制作者の手によることが予想されるが、通肩に衣をまとして禪定印を結び、前述の如くグプタ朝時代サルナー

トとの関連が窺える頭光を有するという3つの点は出土作例の多くに共通する。



図8．仏坐像（ミールプル・ハース）



図9．仏坐像（サルナート）

問題はその服制である。図8を例に、ミールプル・ハースの仏坐像を詳しく観察すると、左右の足裏を見せて結跏趺坐し、その足裏と腹部の間に禅定印を置く。そして組んだ脚部の下から波打つ衣の裾が垂れて蓮華座の上半分を覆い隠している。以下に、前項でも言及したガンダーラ美術とグプタ美術における仏坐像の服制それぞれを確認し、ミールプル・ハースと比較することでいずれとの親和性が認められるか、あるいは認められないかを検討したい。

ガンダーラの仏坐像（図10）では通肩に禅定印を結ぶ場合ほぼ一貫して、衣の裾が脚部を覆い隠して足裏は全く見えないか、見えたとしても片足の爪先がかろうじて確認できる程度である。逆に、脚部の下から裾を垂らして足裏を見せる場合（図11）には説法印を結ぶ場合が圧倒的に多い。従ってガンダーラでは印相と仏陀の着衣方法の組み合わせに一定の規則があったことが窺われる。翻ってサルナートの仏坐像（図9）の場合は、印相は説法印でありながら通肩に衣をまとい、脚部の下から装飾的な襷の刻まれた裾を垂らして足裏を見せている。通肩に衣をまとう際に、脚部の下から裾を垂らし、足裏を見せているのがガンダーラとの決定的な差異である。ここでミールプル・ハース出土例に立ち戻ると、印相こそ異なるものの、服制はサルナートと同様である。サーンチー第一塔四方に安置された仏坐像では同様の服制で禅定印を結ぶ例が見られることから、印相が説法印か禅定印かということについてはここでそれほど神経質になる必要はなかろう。従って服制においてはガンダーラ美術よりもグプタ美術の方が、シンド地方との親和性を想定する。



図10．仏坐像（ガンダーラ）



図11．仏坐像（ガンダーラ）

・説法印

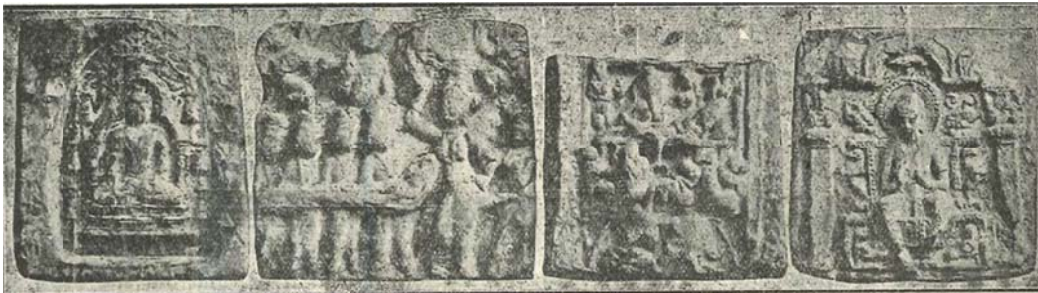


図12．4点のパネル（左から触地印仏坐像、「誕生」、「出家前夜」、説法印仏椅坐像）

前項に見たように、ガンダーラにおいては仏陀が説法印を結ぶ場合、服制は概ね偏袒右肩であったが、グプタ朝時代には説法印の場合にも通肩で衣をまとうようになる。ここで問題にするのは、おそらくトゥール・ミール・ルカーンから出土したかと伝えられる先述の4点のテラコッタ製パネルのうち、説法印を結ぶ仏椅坐像（図12）である。その印相は説法印であるが、ガンダーラ美術における説法印とグプタ美術における説法印は形式が大きく異なる。ガンダーラの説法印は、左手の指を柔らかに曲げて指先を上方に集め、それを右手で包み込むようにするもので、右手の甲を表に向ける。対してグプタの説法印は、左手は掌を内に向けて人差し指と薬指を親指へ曲げ、右手は親指と人差し指で円を作り掌を表へ向ける。問題のパネルでは後者の形式をとっていることが明らかである。



型押しで大量生産されたであろうこのパネルの出土地がシンド地方であることは確実だとしても、制作地が出土地と同一であったか否かには問題が残る。とはいえ、仮にこのパネルがサルナートなどグプタ美術の中心地で制作されてシンドにもたらされたものだとしても、グプタ美術の伝播の証左と見ることは可能である。服制の問題と合わせて考えれば、少なくとも仏像においてはグプタ美術からの影響が強いことは指摘できるであろう。

図13. 説法印仏椅坐像

・仏伝図



図14. 出家前夜（シンド）



図15. 出家前夜（ガンダーラ）

前述の仏椅坐像と共に出土したパネルのうち2点が仏伝図である。de Leeuw は、これらがガンダーラの仏伝図を想起させると述べている。うち1点は出家前夜の釈尊を描いたもので確かにガンダーラの同主題の仏伝図と類似する。ところがもう1点の「誕生」図は明らかにガンダーラの表現とは異なり、むしろ南インドの表現伝統を引いている。ガンダーラでは必ず、右手を上げ足を交差させて立つマヤ夫人の右脇から釈尊が生まれ出で、降誕したばかりの釈尊を受け止めるのは帝釈天である。対して、アマラーヴァティーに代表される南インドでは、釈尊を受け止めるのは居並ぶ四天王なのである。ミールプル・ハースのパネルでは、向かって右方にひととき大きく描かれたマヤ夫人は右手を上げており、釈尊が右脇から生まれたことの示唆と考えることはできる。しかし生まれ出た釈尊を受け止めるべく布を広げているのは、横一列に並んだ四天王なのである。グプタ美術においても「誕生」の場面において釈尊を受け止めるのは帝釈天であるため、この場合はグプタとの関連を想定することもできない。南インドとどの程度のつながりが考えられるのか、今後

の課題としたい。



図16.「誕生」図（シンド）



図17.「誕生」図（南インド）

5. おわりに～今後の課題～

以上、服制や印相、仏伝図など具体的な事例に即してシンド地方の仏教美術と周辺地域のそれとの比較検討を試みた。説法印の場合はグプタ美術との繋がりが明らかではあるものの、シンドで制作されたか否かという問題もはらんでおり、単純に結論を出すことはできない。どちらかと言えばグプタ美術からの影響が強いようであるが、本発表で扱うことのできた事例に限られていることもあって、決定的な議論にまでは到達し得なかった。今後さらに検討を重ねることで、装飾レンガや仏像を制作した工人集団にまで光を当てることを目指したい。